

### 第三節 体育祭で生徒のために走る!!

#### 一、汗と涙の一五〇〇m くめざせ、完走く

体育祭とは本来は生徒が参加するものである。したがって、教師が競技に出る必要性は全くない。しかし私は、井原高校と笠岡高校で何度も一五〇〇m走に出場したのである。

なぜ、一五〇〇m走にこだわったのか？ 皆さんが疑問に思うのも当たり前だろう。その理由の一つは、井原高校の体育大会にあった。

昭和六十年当時の井原高校は、体育祭ではなく体育大会であった。つまり祭りではなかった。簡単に言えば、陸上競技大会のような感じだった。生徒は必ずどの種目かの一つはエントリーしなければならぬ。確か、二つぐらいまではエントリーできたと思う。そして先生方も、必ずどれかの種目の一つ出場しなければならぬというルールだった。勿論、年配の先生方もどれかに出場しなければならなかったが、体に負担をかけない種目もちゃんと用意されていた。当時まだ二十七歳で若かった私は、同僚の先生から、「若いのだからきつい種目に出るように」

と言われた。そこで私が注目したのが、男子一五〇〇m走である。この種目は高校時代の忘れられない思い出があった。

話は昭和四十九年の秋に遡る。

私は高校二年生で、何の目標も生きがいもなく、ただ学校に通っていた。部活動にも入っていなかったし、委員会活動もせず、そして学生の本分である学習もしない。何もしない高校二年生であった。当時流行していた言葉に、三無主義とか四無主義というのがあった。四無主義とは、無気力・無感動・無関心・無責任である。まさに四無主義を地でいくのが私だったのだ。その頃、体育の授業で持久走というのがあった。タイムは測定したら終わりかと思っただけだが、当時の体育の先生は厳しい言葉を発した。「一五〇〇mを六分切れない人は、六分を切るまで何回でも計測するからな」と言ったのだ。よく覚えていないが、私はその当時六分三十秒ぐらいかかっていたと思う。私としては精一杯だった。そんな馬鹿なと思った。

私は運動にはかなりコンプレックスを持っている。運動神経が悪いのは、小学校以来、何をやってもうまくいかなかったからで、体育の時間が嫌いで仕方なかった。この一五〇〇mで六分を切るタイムを出すのはとても不可能なことにように思えた。

しかし私はこの時、一五〇〇mで六分を切るというのを目標として練習しようと考え、毎日

自宅前を走るようにした。「とにかくやるだけやってみよう」と思ったのだ。科学的根拠は何もなかったが、毎日ある程度の距離を夜に走るようにしたのである。

そして、再びグラウンドで走る日が来た。六分を切れなかった数人がスタートした。天気は秋晴れの快晴であった。ペースを守って黙々と走った。あともう少し……。先生の声がある。「五分四十五、四十六、四十七……、五十、五十一」走り切った。五分五十二秒。このタイムは今もずっと覚えている。

六分三十秒もかかっていた私が、なんと五分五十二秒で走れた。ゴールの瞬間、何とも言えない気持ちになった。だが同時に吐き気がして、腹が痛くて倒れ込んだ。笠岡高校のグラウンドで横になって空を見た。しんどい。きつい。

そこへ先生がやって来て声をかけてくれた。「高田、やったじゃないか。運動ができないとか言っとるけど、やればできるじゃないか。よお、やったのー」その一声で、何か体はしんどかったのに妙に心地よかった。一言だけ先生に言った「ありがとうございます」と。

この出来事はこれからの人生で一生忘れてはいけなと思った。高校に入学して何かに向かって前向きに取り組んだのは、考えてみれば初めてだった。何事もやればできるんだということ、身をもって感じた。当時、私は勉強面でもどん底であった。成績は二〇五人の定員で一七〇番

から一八〇番位に低迷していた。しかしである。今は成績も悪いが、勉強も本気でやればできるんじゃないかと思うようになった。愛犬タローという一番の親友を失くして、同級生で仲の良い友達もなく孤独だったあの頃。一五〇〇m走で何かを掴んだような気がした。体育の先生に、六分を切らないと放課後に残して走らせると聞いた時は、なんと理不尽なことをするんだと怒りにも似た感情だった。でも、現在思うのは、逆に感謝の気持ちである。人間、多少無理だと思ふことにも挑戦しなければならぬということを学んだ。

さて、話を井原高校の体育大会に戻そう。どの種目にするか迷うことはなかった。男子一五〇〇mだ。井原高校で三年目、三年A組の担任として、何のために走るのかを自問自答した。「生徒のために走ろう。クラスの生徒の第一志望校合格を祈願して走ろう」理由はこれしかない。クラスの生徒の前で走ることを言うと、大丈夫なのか(?)という不安な生徒の表情が見えた。その時にこう言ったような気がする。「自分は体育が昔から苦手で、運動神経も悪い。みんなはこれから大変な受験という試練がある。辛いことも多い。逃げ出したくなる時もあるだろう。だから僕は苦手なことに挑戦する。一〇〇mのような短距離ではなく、持久走の一五〇〇mにあえて出る」多分こんなことを言ったと思う。

一五〇〇mに出る選手は、当り前だが各運動部でも自信がある人が、エントリーしている。

その中で走るのだから、私は最下位を覚悟した。最下位でもよいが、とにかく完走はどうしてもするという覚悟で挑んだ。

一周二〇〇mのトラックを七周半走らなければならぬ。当時私は三十歳になったばかりであった。スタートしてからペースも順調で、予想以上に走ることができて。一番遅い生徒と並走して最後の一周となった。ひよっとしたら最下位にならなくてもすむかもと思った時に、その生徒がスパートして私は最下位になった。多分、六分ぐらいで走れたと思う。完全燃焼だ。

それ以降、毎年一五〇〇mに挑戦した。二度目の三年生の担任だった三年C組の時には、体育大会は朝からポツポツと小雨が降りだし、始めた以上はやるという結論に達し、雨の中の体育大会となった。一五〇〇mはシューズを脱いで走った記憶がある。ずぶ濡れになって、裸足で走ったこの年の一五〇〇mは、忘れられない思い出となった。

井原高校勤務の最後の年、平成四年度の体育大会は、印象深いものとなった。同僚で仲の良い高月先生も出場したのである。後にも先にも一五〇〇mで教師が二人出場したのはこの時だけだった。高月先生は四歳下でサッカー部の顧問。体力も十分で、生徒と先頭争いをしている。私は定位置の最下位を走っていた。最後の一周となった時には、もう一人旅になっていた。その時、担任していた三年E組の男子二人が私について走ってくれている。残り二分の一周の時

には、クラスのみんなと一緒にグラウンドへ入って走ってくれたのだ。担任としてこれほど嬉しいことはなかった。

この時のE組は、理科の選択が全員化学という珍しいクラスだった。3Eといえば無敵王、ムテキングである。文化祭ではミュージカルに挑戦し、優勝を狙ったがなぜか三位。そして体育祭では全校一の得点をあげて見事に優勝!! 文字通り、無敵王(ムテキング)となったのだ。このクラスも私にとって印象に残る素晴らしいクラスだった。

卒業後、なかなか皆と再会できていないのが現状であるが、同窓会を開いて久しぶりに会いたいものである。

平成五年四月に、私は笠岡高校に転勤となった。教師になる時、一度は母校に戻るといふ夢を果たせた。その年も一五〇〇m走に出場した。私は母校に帰ってから、三年生の担任の時には必ず一五〇〇m走に参加した。もちろん走る目的は、生徒の第一志望校合格の祈願のためである。三年生の担任を笠岡高校在職十三年のうち六回持ったので、初めての年を含めて七回走ったことになる。



周回遅れでも懸命に走る